

フィールドワーク

異文化体験散策 異文化体感フォトコンテスト シンガポール

Cultural Feeling Photo Contest 2019

修学旅行の一部として 総合的な学習の時間 8時間

期 日 : 9月28日(土) 8:00~20:00

場 所 : シンガポール 起点 Four Seasons Hotel リトルインディア、アラブストリート他

参加者 : 2年生 252名 引率教員: 9名

【目的】

- A キリスト教主義を根底に持つソーシャル・アントレプレナーシップを、グローバル化された価値観と共に教育する。
- B そのためのフィールドワーク・プログラムの最終段階として位置付ける。
 - <第1段階> キャンプ: 必要最低限の「モノ」とルールの中で出来得る貢献の発見と実行。
 - <第2段階> 「学術研究」: 社会貢献に不可欠な問題発見と解決。
 - <本段階> 異文化(非「当たり前」)社会、多民族(共生)社会、開発途上(マレーシア[過程]とシンガポール[成果])社会を体感(impression)的に捉えさせることで、各段階における成果を有機的に結合し、上記(1)における「アントレプレナーシップ」、「グローバル化された価値観」指向のベクトルを醸成する。
- C 上記B「impression」の定着。

【概要】

修学旅行プログラム「異文化体験散策」における班別行動中、各自が「異文化」をキーワードにして感動した風景を撮影(Feeling Photo)し、散策終了時に班の中で各自の作品についてプレゼンテーションを行い、班のベスト作品を選出する。さらに、修学旅行後に、学年の優秀作品を学年生徒全員で選出する。

修学旅行における「異文化体験散策」プログラムとは、「異文化の中に自分を置く」という体験のみを目的とする散策である。班別行動計画表上の目的地は、上記目的の為の手段に過ぎない。

本学院では、中学1年から高校1年にかけて、自文化発信能力を高めるための「飛鳥」「奈良」「京都」「長崎」フィールドワークを実施している。この4学年の調査(リサーチ)要素を外したものが本プログラムである。平和学の実践的方法論の一つであるエクスポージャー(Exposure)を意識して構成されている。つまり、

Not only look but see (単に「見る」だけでなく「見通す」)、

Not only hear but listen (単に「聞こえる」だけでなく「聴く」)、

Not only know but feel (単に「知る」だけでなく「感じる」)

という感覚を重視しており、現場主義の重要性を訴えるプログラムである。

インド人街、マレー人街、中華街のそれぞれに設けられたチェック・ポイントは必ず通過しなければならないルールにしている。目的地への散策中で、異文化を体感し、カルチャーショックで感動するしかけである。個々人が「あれは何?」、「なんで?」、「すごい!」を見つけ、その「感覚」を意味付けして、さらに定着させるために、写真撮影をする。そして、その感覚(Feeling)を普遍化する作業(共有)が Cultural Feeling Photo Contest である。

【撮影のフィールド】

12時間で、3箇所のチェックポイント(中華系、インド系、イスラム系)を通過し、異文化とふれ合う時間を持つ。

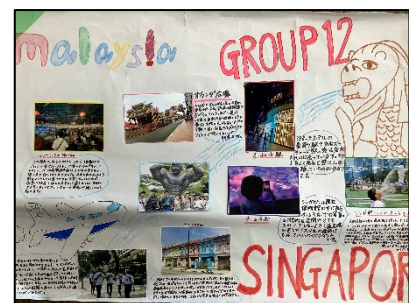
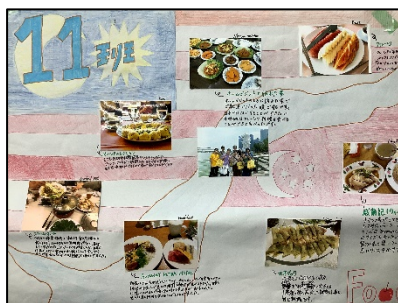
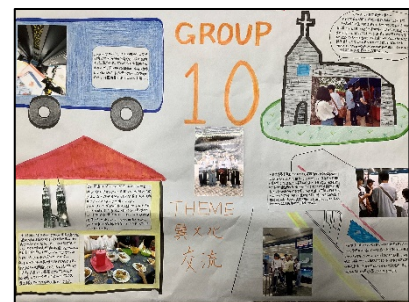
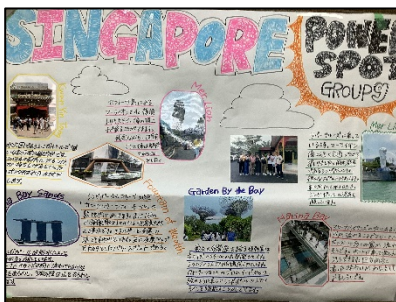
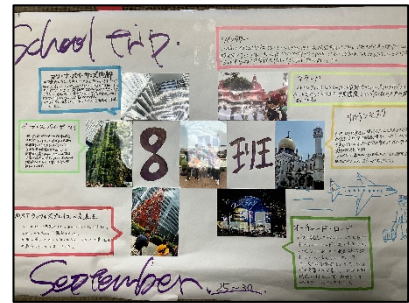
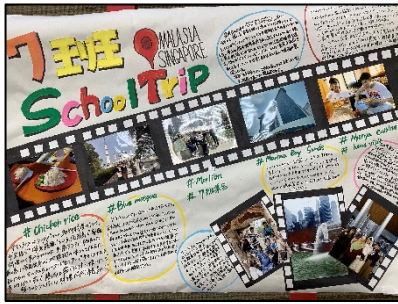
たんなる散策ではなく、写真を撮る、班の中で共有する、なぜかを考える、帰国後に全生徒が共有するというしくみをつくったことにより、価値観の発見、見直しにつながった。

異なる文化的背景を持った人と出会い、生活する、仕事をともにしていくときに、異なるものへの興味や寛容さが養われていった。

【コンテスト実施手順】

1. 画像の収集を指示 *各種記憶媒体による提出、または、air drop などの通信情報共有手段
2. 学年集会で説明 → 作品掲示用紙の配布
3. 写真印刷(2 Lサイズで) → 学年廊下に掲示 → 投票用紙の配布
4. 投票用紙の回収
5. 投票結果の集計 → 表彰状の作成
6. 結果発表と表彰 (学年集会) → 1位は賞品有 (異文化的な「モノ」)
7. 明星祭修学旅行展示 → プログラム説明と作品展示

作品の例



ミャンマースタディーツアー

- 【目的】・異文化受容力を養成する。
 ・現場主義への気づきを育む。
 ・開発途上にある国の現状を知る。
 ・ソーシャルビジネスの実例に触れる。

【内容】

- 主催 : 啓明学院
 企画 : 啓明学院、一般社団法人 裸足医チャンプルー
 協力 : Barefoot Doctors Group Myanmar
 期日 : 8月22日(木)～8月29日(木) 7泊8日
 場所 : ミャンマー
 参加者 : 2年生 4名、3年生 12名 合計 16名 引率教員 : 2名

【研修概要】

- 1日目 : ヤンゴン到着
 2日目 : 北部の古都マンダレーーピンウーリン移動/ リス族との交流
 3日目 : ピンウーリンー八角平和計画体験
 4日目 : 東南アジア仏教三大遺跡 バガン観光
 5日目 : ミンダッチン族との交流、八角平和計画体験
 6日目 : ミンダッチンバガンーマンダレーーヤンゴン移動
 7日目 : ヤンゴン観光 シュエダゴンパヤー参詣
 8日目 : 帰国

【事前・事後学習】

回	期日・時間帯	場所	内容
1	6月22日(土) 13:30～14:30	啓明学院高校の教室	ミャンマーについての保護者・生徒対象説明会
	14:40～16:40	同上	ミャンマー概論、八角平和計画概論
2	6月27日(金) 16:00～18:00	同上	林健太郎医師による講演・ワークショップ
3	7月2日(火) 16:20～17:20	同上	ツアーミーティング
4	8月6日(火) 10:00～12:00		学習会(プログラムの趣旨について)
5	8月30日(木)～9月4日(火)	家庭	① 振り返りシートの作成(ツアー参加前後の意識の変化について)
			② ツアー中に自ら撮影した写真の中からベストショットを選び、理由を記述する。

【総括】

今回のツアー参加生徒の特徴は、上級学年生徒のほとんどが楽しい旅行気分に参加していた。インド訪問に比べてカルチャーショック体験としてのハードルが低いため、面白そうであるというだけの興味本位で参加を決めたようである。過去2回のツアー参加生徒に及ぼした教育効果は望めなかったが、一般的な日本の高校生感覚生徒に与える影響であると思われる、小さな意識変化を見て取ることができた。

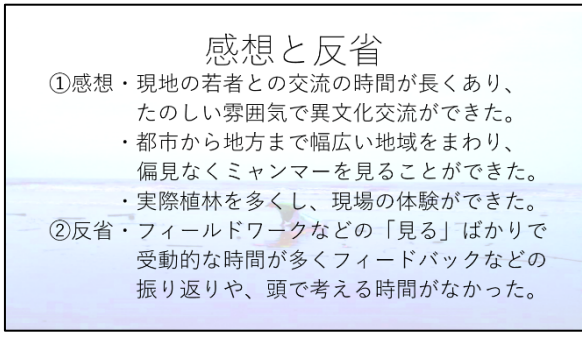
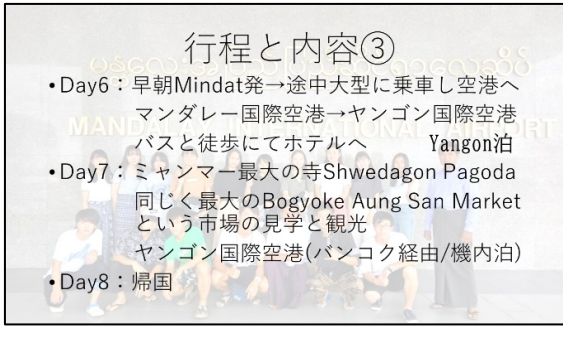
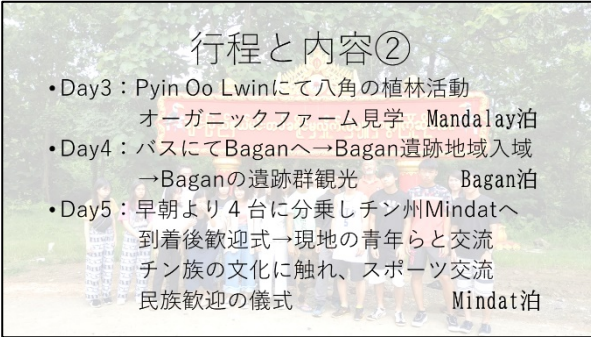
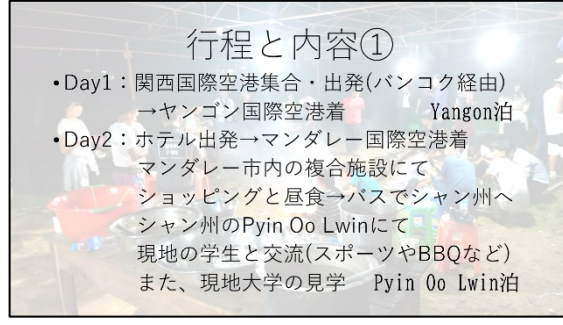
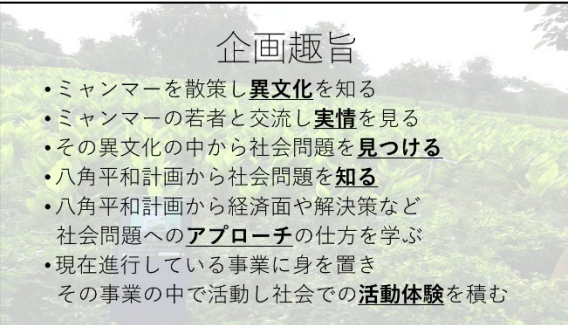
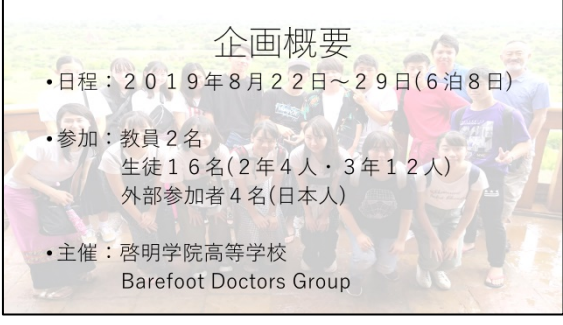


全国高校生フォーラム 2019 での発表 12月

ミャンマースタディーツアー



フィールドワーク報告月間（10月）のポスター発表



マレーシアワークキャンプ

【目的】：開発途上国の社会課題(環境、経済、教育など)を知る。

【内容】

主催：NPO 法人ブレンヒューマニティ
期日：2019年8月13日(火)～20日(火) 7泊8日
場所：マレーシア ボルネオ島 サバ州 オイスカ村ほか
参加者：1年生4名、2年生1名、3年生4名 合計9名

【研修の概要】

1日目	関西国際空港～コタキナバルへ移動	宿泊
2日目	オイスカ村着、ホストファミリーと対面	ホームステイ
3日目	オイスカ村植林活動	ホームステイ
4日目	地元小学校を訪問、植林活動	ホームステイ
5日目	植林活動、村人とのスポーツ大会	ホームステイ
6日目	日曜市場見学、文化交流会	ホームステイ
7日目	オイスカ村発 観光、コタキナバル発	機内泊
8日目	関西国際空港着	

【事前学習】

期日：7月

内容：マレーシアの概要として国、言語、宗教、生活などを、環境問題として熱帯雨林伐採、地域経済などの基礎知識を学んだ。街頭募金を行い、植林の苗木を購入する資金を集めた。

【事後学習】

期日：9月

内容：ふりかえりと報告会

この研修で生徒は、マレーシアのボルネオ島にある農村部を訪れる。現地での生活体験を通して、日本での生活がいかに恵まれているかを、生徒は知ることになる。たとえば、生活インフラ(水道、電気、ガス、通信、学校、医療機関など)の未整備である。

不便だという事実から、社会課題の発見にいたる。また、その社会課題が日本と結びついていることにも気づいていく。このワークキャンプ自体が、村の経済を支えている側面もある。つまりこのワークキャンプは、エコツーリズム型のソーシャルビジネスになっていて、持続可能な発展を目指しているのである。

本学院の卒業生が大学進学後に、このワークキャンプをスタッフとして支えている者が5名以上いる。SGH指定以後に、生徒が継続的にソーシャルビジネスの現場に関わり続けている証左である。

『人に尽くすこと』

3年 吉田 知永

このワークキャンプで、私はホストファミリーに大変お世話になった。現地での日々をふりかえって、私の心境の変化を述べようと思う。

日本での事前研修では、「村は大変貧しく、電気は自家発電、水は雨水を貯めて使うので、電気や水は大事に使いましょう」と指導を受けていた。しかし、現地の村にはシャワーがあった。節水や節電についてホストファミリーから注意されることもなかった。一度雨が降って、シャワーが出なくなったときは、手を洗うところにつないでいたホースを、わざわざお風呂場まで持ってきてくれた。部屋には人数分のコンセントと扇風機があり、私たち日本人が快適に生活できるようにしてくれていた。マンディー*1のときも、シャワーの下に桶があったので、日本人のためにシャワーをつけてくれているのかなと思った。ホストファミリーがシャワーを使っている音を1度聞いたから、考えすぎかもしれないが。

心遣いは、食事や植林活動のときにもあった。たとえば、マカン*2の時間だ。私のホストファミリーは4人家族だった。食卓には4脚の椅子しかなかった。この家は私たち日本人を3人受け入れてくださったので、マカンの時間には、少年と私たち3人しか座れない。父親、母親、少年の弟（妹）は、きっと私たちの食後に食事をしていただろう。そう思うと、なんだか申し訳なくなった。ゴムの木の植林中も、現地の人たちは、私たちが慣れない手つきで悪戦苦闘しているのを見ると、手伝ってくれたり、話しかけてくれたりした。炎天下での単純な作業が楽しい時間になった。

お別れの日、お父さんから、「いろいろできてないことあってごめんなさい。ご飯がおいしくなかったら、ごめんなさい。シャワーも、十分じゃなかったらごめんなさい。」と言われたときは、涙がこぼれそうになった。

「おもてなし」という言葉があるが、日本特有のものではない。英語でHospitality、マレー語でHospitalitiという。私たちは、現地の人々の気遣いがあったから快適に過ごせたのだ。私はだれかのためにここまで尽くせるだろうか。今はできないかも知れないが、いつか私も人に尽くせる人間になろうと思った。植林をしてマレーシアの自然破壊を止めよう、そんなふうに考えて現地の人に尽くしているつもりだった私の方が、学ぶことが多かった。

日常の世界を飛び出して、言語も生活も文化も異なる人たちと触れ合ったことで、新しい発見ができた。マレーシアワークキャンプは私にとって冒険だった。参加して本当によかったと思う。

*1 マンディー マレー語で、水浴び、シャワーのこと。

*2 マカン マレー語で、ご飯、食事のこと。

フィールドワーク報告月間（10月）のポスター発表



マレーシア植林ワークキャンプ



吉田 知永(高3A) 小嶋 優里子(高3B)
 藤井 映里奈(高3C) 三浦彩佳(高3D)
 津川菜々香(高2B)

主催者 :NPO法人ブレンヒューマンティ
 期間 : 2019年8月13日~20日
 日程 : 中高生29人
 場所 : マレーシア ポルネオ島 サバ州



事前学習

- マレーシアの気候、宗教について
- 現在の地球環境問題について

募金活動 (計2回)

集められたお金は植林活動の苗木代にしました

総額 166,299円




植林活動

- 現地ではゴムの木を植えました




ホームステイ

- 6日間オイスカ村でホームステイ
- フリータイムには家族や友達と過ごす






文化交流

- スポーツ大会
- 文化交流会 etc





今後の課題

- 継続的な植林活動
1分間に東京ドーム2個分の森林が伐採されている(先進国の商業伐採のため)
- 学んで体感したことを伝える
村での収入源が少ないこと
水や電気をとても大切にしていること
言葉を超えてつながるコミュニケーション

高校生国際交流の集い 2019

期 日 : 7月25日(木)~26日(金) 1泊2日
場 所 : 関西学院大学西宮上ヶ原キャンパス
参加者 : 3年生7名 希望者

【生徒のふりかえり 抜粋】

高校生国際交流の集い 2019 を終えて

3年 三中理央

去年、このプログラムがあること知ったが、高校生活で最後となる夏の試合をたくさん控えていたため参加することができなかった。なので、今回のこのプログラムへの参加は待ちに待ったものだった。しかし、留学生と関わりたい、楽しみたいという気持ちだけでこのプログラムに申し込んだ私は、英語で会話をすることさえ上手く出来ないのに、国際問題について英語で討論することができるだろうかという不安が次第に大きくなっていった。とりあえず今出来る事は何かを考え、話し合いについていくことが出来るように3日間事前学習をしてこのプログラムに挑んだ。

私の班の人は、コロンビア、タイ、アメリカからの留学生、イタリアとアメリカの父を持つ人や以前海外に住んでいた人など英語を流暢に話すことが出来る人たちだった。話し合いの時間はもちろんのこと休憩時間、食事の時間、運動の時間の会話はほとんど英語での会話だった。初めは、英語で会話することが出来ない自分を隠すために、みんなの会話に相槌を打つだけだった。このままの自分ではいけないと思う気持ちがあるものの、頭の中で英語を並び替えているうちに違う話題になってしまい、時間だけが過ぎていった。話し合いの時間になり、私は事前学習で知ったことや情報をみんなに共有する機会を得た。私は英語の話し合いに置いて行かれないために相当量の情報や自分の意見を紙に書いていたので「事前学習で調べたことを言ったら引かれるかな」「真面目過ぎると思われて笑われるかな」などと考えた。しかし、このままの自分ではいけないと思っていたので勇気を振り絞って班員に共有した。すると、予想とは裏腹に、班員は私の意見や調べてきたことを真剣に聞いてくれた。私はこの時、自分の思ったことを素直に相手に伝えることの重要性に気付いた。それからは、完璧な英語の会話を目指さず頭に浮かんだ単語を言ったり、分からない単語があれば会話の途中でも聞いたりして、濃い話し合いになった。班での話し合い以外の時間も、自分が話したいと思ったら話しかけるなど直感で行動することを意識したことで、色々な国や学校の人と仲良くなることが出来た。2日目の最後に、このプログラムに参加した人たちの前で、班員とプレゼンテーションをした後の達成感はとても大きかった。

2日間という短い期間だったが、多くの人から刺激をもらい、自分の視野を大きく広げることができた。また、新たな目標も見つかり、私にとってとても良い経験になった。



SGH 報告：フィールドワークポスター展示 タイトル一覧

開催日：2019年10月1日(火)～10月31日(木)
会場：啓明学院チャペル前ホール、メアリーホール

- ①ミャンマースタディツアー
- ②マレーシアワークキャンプ
- ③フィリピンスタディツアーを通して
- ④カンボジア小学校建設 ～旅ぼら～
- ⑤タイ 孤児院の子どもたちと遠足へ
- ⑥英国国際交流研修
- ⑦ROOTプログラムのシアトル研修
- ⑧高校生国際交流の集い
- ⑨世界市民明石塾
- ⑩関西学院大学 高大連携科目履修 「総合政策トピックス A」
- ⑪KG オールスターキャンプ
- ⑫豊岡 Youth プロジェクト
- ⑬石巻演奏ボランティア
- ⑭学習支援ボランティア
- ⑮明石天文科学館 学芸員ボランティア
- ⑯YMCA サマーディキャンプ
- ⑰富士登山キャンプ
- ⑱海洋冒険キャンプ
- ⑲青島キャンプ
- ⑳啓明ユースアドベンチャーキャンプ
- ㉑啓明ジュニアアドベンチャーキャンプ



豊岡 Youth プロジェクトの発表

主催：豊岡青年会議所
期日：5～6月
内容：SDGsを意識したまちづくり
地方創生プランを高校生が考える
連携：兵庫県豊岡市の高校生、関西学院大学
参加：3年生 5名

- ・ポスター制作に関わった生徒は100名を超えている。
- ・年間を通じて社会貢献活動や自己研さん活動に取り組んだ生徒の割合は49%である。
(令和元年度アンケートより)